
赤い鳥

光姫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い鳥

【Nコード】

N3687E

【作者名】

光姫

【あらすじ】

花街で一番の稼ぎ頭の蘭に客ではない訪問者が現れる。

プロローグ

雨が降っていた

時折遠くで雷が光る。

華やかな花街は人の行き来が少なく、呼び込みも仕事を放棄して軒下でタバコを吸いながら空をみる。

一番大きな店の稼ぎ頭の名は蘭と言う。

もちろんこれは字である。

頭を結び、沢山の簪と沢山の色かけの着物は目に鮮やかだった。

「蘭。客人だよ」

部屋の間に向こう側で使用人に声を掛けられ、開け放しの窓から視線を床に落とし薄笑いを浮かべた。

しばらくして入ってきたのは、身なりはきちんとしていて、立派な顎髭が威厳を表している老人だった。

老人は正座をし蘭を見据える。眼光が鋭かったが、そんな人間を蘭は嫌いでなかった

ここで、何の用かと質問するのは愚問ではあるが、女遊びをしにきていない事はわかっていた

老人は深く頭を下げた、

「お迎えに参りました。」

蘭は老人をみて立ち上がった。

蘭は老人を鳥籠から逃がしてくれ人間だと判断した。

真っ暗な闇はもうそこまで来ていて、飲み込まれそうだった。

影武者

白馬が引く馬車は静かに街の中を走っていく。

時折遠くで雷がなっているが、雨は上がっている。

対面式の座席には、蘭と、目の前には先ほどの老人が座っている、狭い馬車の中で、蘭の好きな香が充満している。老人は、少し頭痛を覚えていたが、常に笑みを浮べていた。

「これから何が始まるの？」

蘭は何も言わない老人に質問した、自分からこの馬車に乗ったがこれから始まるうとしている事は知りたいと思った

「貴女は、わが朱雀国の君主に抜擢されました」

遠くで雷が光った

数秒遅れて音が響く

いろんな事が巻き起こる花街で育った蘭は、何事にも動じない強さがあつたし、

今回の老人の発言にも動じる事はなかったが、ふと、自分にそんな資格があるのかどうかと疑問に思った。

しかし自ら選んだ道なのだから、今更拒む事は無理な事だ少し感覚が違うが

「後悔先に立たず」と言う奴に近い。蘭の場合は軽く思うだけでなにとも潔い性格だった。

「拒まれるかと思いました」

何も答えない蘭を見ながらどこか安堵したように言う老人は可愛い顔をしていた。

「これも運命でしょう」

運命何て言葉は大嫌いだと思っている。

自分で選んだ道を目に見えない何かの影響でこうなったと言う感覚が好きではない。

が、この言葉は実に使い勝手がよかった

幻想的で甘美な響きだ。誰もが憧れる響き。

「ですが何故」

何故自分が目に留まったのか不思議な所だ。「私共は、常に次期君主を探しております」

答えになつていな気がした

「私は花街しか知りません。まして、政なんて」

「問題ありません」

そう言った老人の眼光は鋭く蘭を射抜いた。

老人はすぐに優しい顔つきに戻り言葉を続けた

「貴女は実に良く花街を統一されていた。」

関心しながら話す老人を見て彼女は薄く笑った。

「あなたが居なくなり花街は荒れますな。」

老人の言葉に彼女は涼しい顔をしているが、そう言われる心当たりを探していた。

まとめていたと言うより、誰かの相談に乗っていただけだった。それで、まとめていたと言われるのは違う気がしたが、国の政治と言うのは誰かの話を聞く事から始まるのかも知れないと妙に納得してしまった。

しかし、

自分が居なくなつたからと言って荒れる事はまずないし、誰かが上手くやる。

人間とはそういうものだ。

「私は何をすればいいのです？」

これは運命ではない

自分で歩んだ道だ。蘭はそれを自分自身で再確認する為に話を進めた
「まずは館に来て頂き影武者を選んでいただきます。」

「影武者……」

「影武者は国の朝議や、公の場に姿を表す者です。」

「なぜそんな事を」

影で何かをするのは女達の陰湿なイメージがあつた。

「あなた様は大事なお方でいらっしゃる。命を狙う者もありましよう」

「まるで私が影武者のようね」蘭は年に何度も表に出てきていた煌びやかな主君を思い出した。あれが偽物だと誰が考えつくだろうか。堂々とした出で立ちには真の王に相応しかったように思う

老人は目を瞑った。

ほどなくして従者が馬を止める声が聞こえた。いつの間にか館に付いていたようで馬車の扉が古めかしい音を立てて開くと老人が先に降り蘭は後に続いた。

馬車から降りると蘭は大きなため息をつき、自分の体が固くなっているのに気がついた

知らず知らずのうちに緊張しているのだと理解した。

「ここが朱雀国の主君の館、朱雀宮でございます。」

蘭は大き過ぎる門を見上げた。花街の入り口の門よりも何十倍も大きい。どこまでも続く白い塀。等間隔に支える赤い丸い柱、屋根は黒い瓦屋根

塀の高さは大人五人分と言った所か

代々王と言つものは自分の権力を物の大きさで示す風潮があつたが、目の前に広がるのはまさにそれだった。

老人は石畳の上を歩き出し、彼女も後ろに続いた。まっすぐな道をしばらく進むと20段以上ある階段の上に大きな平屋の建物が見えてきた。

「この建物が表殿でございます。ここでは朝議を主に行い、中には守護神朱雀の珊瑚像がございます。その前に玉座がございますがあなた様には関係ございません」

広い敷地内。いくつもある同じような建物の説明を簡単にしてくれるが、最後には関係ないと言う老人に蘭はイライラした。

「私の拠点になる所はどちらです？」

丁寧に言つたつもりだったが、老人には心中がわかってしまう言い方になってしまった

老人はしばらく廊下を歩くと立ちどまった。渡り廊下の先を指差した
「この先が本殿でございます。ここに護衛が立ち、私と影武者のみ
行き来出来るようになっております。」

私はと言いかける言葉を飲み込んだ

影武者を選び自分はここから出る事はないのだと悟ったからだ

「鳥籠か」

蘭は先を歩く老人との間隔を充分取ってゆっくり歩いた。もう見る
事のないであろう風景をゆっくり見たかった。やがて白い大きな壁
が現れた

今までの世界を区切るような壁

老人は懷から鍵を出し壁の割に小さな扉を開けた

「ここから先の敷地は自由に動いて下さって結構でございます」そ
んな説明を耳にしながら一歩一歩と前に進む

月明かりに照らされて現れたのはまるで絵に描いたような極楽浄土
渡り廊下の脇に大きな池。その池に注がれる小川草花はきれいに手
入れをされている

「これがあなた様の生活拠点。極楽浄土でございます」

蘭はゆっくりと歩き出した。不気味なほど静かな空間。本当に別世
界に來たようだった

「ここには生活の全てが揃っております。」

そう言つて明かりが灯っている部屋に入っていく老人を蘭は追いか
ける。入った部屋は蘭の為に用意された寢室のようだった。天付き
のベッドに机、椅子、箆笥が置いてある。

どれも素晴らしい彫刻や装飾があらわれていた花街で常に一番だ
った自分の部屋とは比べものにならない位鮮やかだ
ぐるぐると辺りを見回すすると奇妙な風景が目に入った

「なに？」

蘭は小さく声を出した

部屋には数人の男が目隠しをして床にひざまづいている。

彼女は一人の男の目隠しをはずそうと近寄った

「なりませぬ！」

怒鳴り声が部屋を支配した

「先ほども言いましたが。この敷地内は私と影武者のみが入る事が許される場所。

まずは、この中より影武者をひとりをお選び下さい。」

老人の気迫に負けないよう気丈に振る舞いながら蘭は数人いる男の前を行ったり来たりした。選べと言われても何を基準にしているのかわからない。

目が隠されていて相手の表情がわからない

蘭は男達と同様に目を瞑り数本歩きそこにいた男の肩に手を置いた
「彼にします」

蘭は目を開けて老人を睨みつけ、男の目隠しをゆっくりと外した
そうしている間に他の男達は部屋を出た

「名はなんと言う」

老人は男に聞いた

男は、ゆっくりと顔を上げた。蘭はその顔を見ると数本後ずさった。
目は見開き男をじっと見つめた

確かにかなり綺麗な顔立ちだ、顔の線が細く切れ長の一重。薄い唇
は桜の様だった

蘭の瞳に涙が浮かんだ。

「我が君？」

老人は蘭に問いかけた彼女は目をぐつと瞑り

「何でもありません。名をお聞きしてよろしいですか？」

と何事もなかったように話した

「……………光嬉」

蘭は名前を聞いて大きく安堵のため息をついた。

「ふむ。光嬉よ。汝は今より、我が君の影武者として生きる事となる。

我が君の意のままに動くように勤めよ」

老人は見下ろしながら光嬉に言う

光嬉はと言うと顔に何も感情がなく老人をみつめていた。
「ご老人」

蘭は老人に声を掛けたすると老人は首だけ蘭に傾けた

「貴男の名を聞きたい」

老人は蘭の前に跪き

「吏珀と申します。」

それだけ言うと吏珀は立ち上がった

「さて、今宵は遅い

休みましょう」

と言い吏珀は自分の腰を叩きながら部屋を出て行った。残された蘭と光嬉は所在なさげに当たりを見回した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687e/>

赤い鳥

2011年1月18日21時50分発行